懇話会の出発の頃

岡山大学教育学部
伊澤 秀而

The Dawn of JSPP: Debates Began at the Late 1960s

Shuji IZAWA
Faculty of Education, Okayama University
3-1-1 Tsushima, Okayama, Okayama 700-0082, Japan

昭和43年(1968年)に遡る。5月だったと思うが、東京教育大の岩原信九郎先生から“生理心理学の討論会を企画した。学会などではあまり具体的な討論もできないので、自由に意見交換をする気楽な集まりを持ちたい。”というご案内をいただいた。このお誘いで、翌6月の初旬8日、夕刻2時間の予定で30名ほどが当時の東京教育大(現在は筑波大東京キャンパス)の会議室に集まった。永村寧一氏から脳波の多変量解析をテーマにネコの前頭部脳波のパターン解析のデータ提供があって、遠慮のない意見の交換があったのを憶えている。

この討論会の火は引き継がれて、続いて翌7月、新見良純先生の企画で早大で2回目が開催された。生理心理学・精神生理学懇話会と名乗って開催され、略して懇話会という名がこの会の通称になったのはこの時からである。皮膚電気活動をめぐっての討論のほか、わが国の精神生理学研究の動向を海外に紹介する企画についての協議など、成果を収めて、次回は秋にと予定して終わった。

だが折り悪しく、1968年から1970年は大学紛争で

大学が苦悩に満ちた時代であった。大学の閉鎖や混乱で懇話会の開催も次第に難しくなり、隔月には開きたいと考えていた会だったが、しばらくは見送るほかないという事態になってしまった。結局、次の懇話会を開くことができたのは翌年の春であった。

筆者は当時、東京学芸大にいた。特殊教育の大学附属研究所(東京学芸大学特殊教育研究施設)ができてすぐの頃で、ここで心身障害の研究に携わっていた。特殊教育は、今の学校教育法では特別支援教育と改称されているが、生体系から切り込む課題の多い教育領域である。それだけに懇話会との縁も深かった。

中断後の第3回懇話会の再開は、大学でも研究所のせいで平穏だった私どものところで担うことになった。久し振りの開催であった。保存してある開催案内を見ると、中断、再開の経過が記してあって感慨が深い。その文面を抜粋して載せておきたい。

“昨年7月の第2回懇話会(於 早稲田大学)にお集まりいただいたまま、以後の開催が遅れご迷惑をおかけしました。ご承知の通り、第3回懇話会は、日本大学の山岡 淳先生のお世話で昨年秋に開催と

2012.8.28 受稿, 2012.8.28 受理, 2012.12.28 J-STAGE 早期公開, doi: 10.5674/jjppp.1207si, JOI: JST.JSTAGE/jjppp/1207si

連絡者及び連絡先: 〒700-0082 岡山市津島 3-1-1 岡山大学教育学部 伊澤秀而
Tel: 086-272-7455

いうことに決定しておりましたが、周知の日本大学のご事情で開催の見通しが立たない状況にありましたので、ご依頼により東京学芸大学でお引き受けすることに變更いたしました。しかしその後も、東京大学、東京教育大学ほかの学内事情も重なり、開催日時を決めかねておりましたため、結局今日までに至った次第です。”

第3回の懇話会は1969年4月12日、地下鉄虎ノ門駅に近い国立教育会館の会議室を借りて行われた。大学が都心から離れていて、往來の便を考えてここを借りたが、そのお陰で、その時に提出した施設利用申込書が書類として残っている。これには、参加予定人員40－50名、使用時間14－19時、使用料4,800円と記してあって、国立教育会館の承認印が押してある。当日の出席者数は、見込んだ通りだったと思う。使用料は、今1,000円が普通の科学雑誌が200円であった時代の4,800円である。捻出に心配したが、大学の経費で賄うことができた。国立教育会館は、法の廃止で、その後2001年に解散して現在はない。改めて、時の流れを感じている。

東京学芸大附属の特殊教育研究施設には、生理心理学関連分野を扱っている部門が二つあった。当日の話題もそれぞれ一題ずつ出すことにして、第一部門の水谷徹氏と第三部門の筆者が担当した。水谷氏からは閃光誘発電位と覚醒水準をテーマに話があり、筆者は、脳波のパターン解析とその方法論について研究の現状を披露することにした。

誘発電位は、中枢応答過程を取り出している点で、認知情報処理の神経過程をほどく糸口になる。しかし、いわゆる誘発加算法によって自発背景脳波から平均電位を分離する電子工学技術は、当時、ようやく緒にいたばかりであった。こういう状況にあって、先駆的な実験の実情を話してもらえたのは何よりだった。

脳波のパターン解析については、Gibbsのアトラスを材料に、生後7週から37歳までの8誘導脳波を計算機で分析して、脳波パターンの多変量定量化と発達情報の検出を図った追跡の成果を紹介した。1966年の脳波学会に出したもののだが、まだ実験室に計算機がなく、共同利用機関であった東大計算機センターに足繁く通ってオフラインで処理していた時期である。当然、未開拓の領域であった。

懇話会が終了したあと、この日は同じ会場で、予

め案内してあった3年後の国際心理会議（第20回1972年東京で開催）についての懇談も行われた。会場を7時まで借りておいた（前述）のはこのためであった。同国際会議のシンポジウム（生理部門）の企画について、組織委員会から懇話会に検討の依頼があったからである。

発足2年目のこの年は、懇話会はこのあと6月に第4回、9月に第5回と継続して開催された。第4回は日大の山岡先生のご担当で虎ノ門共済会館であり、第5回は東大医学部の平井富雄先生の企画で赤門学士会館にて行われた。前に触れたように、山岡先生には第3回懇話会を主催していただくはずであった。事情止むなく筆者が交代したが、時が至り、当初の計画通り日大主催で実現したのが第4回の懇話会であった。第4回は2題、第5回は3題の話題提供があって討論が行なわれている。

こうして懇話会は3年目を迎えた。1970年である。第6回は春、第7回は年の瀬に開催された。出発の時に戻って、この2回はそれぞれ、東京教育大、早稲田大の主催で行なわれた。懇話会が序章を終えて、いよいよ本論に入るのかという思いであった。この年、筆者は渡米、次の年の秋まで留守にしていたので、どちらの会議にも出席できなかった。

草創期の懇話会の姿は、見てきたように、近隣の研究同人が集まって話す勉強会であった。人数も多くて50人、土曜日の午後数時間の懇談が慣例で、紛れもなく懇話会だった。まだ会の正式名称もなく、生理心理学・精神生理学懇話会と呼んだり、ある時は生理心理学懇話会であったりもした。心理学と生理学の境界領域をどう呼ぶのが正當か、本格的な議論は残してまず出発したのであった。

その頃、今は廃刊になっているが科学雑誌“自然”の1968年8月号に、物理学の早川幸男氏の“ロビーでの科学”と題した随想が載った。科学の専門分野での情報交換のことに触れたものだが、談話の効用のこと書かれていた。

“学術会議では講演のセッションそのものよりも、休憩の時に一対一で行われる談話のほうが味が深い。それは堂々たる講演の裏にあるごたごたした台所の様子や、秘密情報であったりもする。これはもう情報の交換というより人間と人間のふれあいと言ったほうがよいのかも知れない。学問は高度になればなるほど個

性が強く入ってくるから、ロビーでする一対一の話し合いが大切で、これこそ学術的会合の最大の効果である。”（要旨）

氏の執筆は、その少し前に東京で開かれた国際宇宙空間研究会議を振り返ったものであった。会議の本舞台とは別に、休憩時間にロビーで交わされた対話に実は測り知れない価値があった。こういう論旨である。

われわれの懇話会が創始された時の精神も同じであった。本稿の冒頭で、岩原先生から最初に届いた発会の案内のことを紹介したが、その文面を見てもこの

ことが歴然としている。

学際領域、境界領域など、新しい学問領域の開拓への挑戦が盛んになってきたのは1950年代からだったろうか。たとえば、生物物理学の領域が本格化し始めたのもこの年代の後半である。それでも、その必要性が叫ばれてから10年以上を経ていると聞いていた。懇話会が生まれて、これから10年かかるのか20年か分からないが、われわれも、いよいよ新しい境界領域を築く原点に立ったと感じたものだった。